

福満遺跡  
第12次発掘調査報告書

FUKUMITU SITE

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

2015

2015

彦根市教育委員会

# 福満遺跡

## 第12次発掘調査報告書

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

2015

彦根市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、民間会社の宅地造成工事に伴い、平成25年6月21日から平成25年7月31日にかけて実施した、福満遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。整理調査については、平成26年6月10日から平成27年3月にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市西今町字小橋ヶ板298-1、298-2、299に位置する。
3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

### 平成25年度（現地調査）

教育長：前川 恒廣

文化財部長：入江明生

文化財部次長（兼文化財課長）：西田哲雄

課長補佐：久保達彦

史跡整備係長：北川恭子

文化財係長：木戸洋平

主　　査：深谷 覚

主　　査：池田隼人

副主査：三尾次郎

主　　任：森下雅子

主　　任：林 昭男

主　　任：戸塚洋輔

主　　任：下高大輔

技　　師：田中良輔

臨時職員：佃 昌幸

### 平成26年度（整理調査）

教育長：前川 恒廣

文化財部長：長谷川隆司

文化財部次長：西山 武

文化財課長：久保達彦

課長補佐（兼文化財係長）：木戸洋平

史跡整備係長：北川恭子

主　　査：深谷 覚

主　　査：池田隼人

主　　任：三尾次郎

副主査：森下雅子

副主査：林 昭男

副主査：戸塚洋輔

主　　任：下高大輔

主　　任：田中良輔

臨時職員：沖田陽一

臨時職員：堀田佳典

4. 現地調査と整理調査は田中が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：久木正弘 平田清司 森谷義男（作業員）

　　大西 遼 北森 光 荘林 純（滋賀県立大学学生）

　　佃 昌幸（臨時職員）

整理調査：沖田陽一 堀田佳典（臨時職員）

5. 本書で使用した遺構実測図は、佃 昌幸、北森 光、莊林 純、田中が作成し、遺物実測図については沖田陽一、堀田佳典、田中が作成、遺構・遺物の写真撮影は田中が行った。

6. 本書の執筆及び編集は、田中良輔が行った。

7. 本書で使用した方位は平面直角座標第IV系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

## 目 次

---

### 例言

I はじめに	1
II 位置と環境	1
III 遺構と遺物	2
IV 調査の成果	7

### 写真図版

### 報告書抄録

---

### 図版

1	1 調査区全景（北西から）
	2 ST01完掘状況（南西から）
2	1 ST01土層断面（東西断面—南半部）
	2 ST01土層断面（東西断面—北半部）
3	1 ST01遺物出土状況（西半部）
	2 ST01遺物出土状況（東半部）
4	1 ST02完掘状況（南西から）
	2 ST02完掘状況（北から）
5	1 ST02土層断面（西から）
	2 ST02土層断面（東から）
6	1 SD01完掘状況（南から）
	2 SD01土層断面 D—D'（南東から）
7	1 SD01土層断面 B—B'（北東から）
	2 SD01土層断面 A—A'（西から）
8	1 SD02検出状況（北東から）
	2 SD02掘削状況（北から）
9	1 SD02土層断面 C—C'（北から）
	2 SD02土層断面 E—E'（北から）
10	1 ST01出土遺物
	2 ST01出土遺物
11	1 ST01出土遺物
	2 ST01出土遺物
12	1 ST01出土遺物
	2 ST01出土遺物
13	1 小穴群出土遺物
	2 P4・ST01出土遺物



## I はじめに

本書は、民間の宅地造成工事に伴って実施した、福満遺跡（彦根市西今町地先所在）の発掘調査成果をまとめたものである。今回の発掘調査に先立ち、平成25年5月7・8日に開発面積1,726.83m<sup>2</sup>を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ7箇所を設定して試掘調査を行ったところ、全てのトレンチにおいて遺構及び遺物を確認した。

このため、平成25年6月21日～平成25年7月31日の期間において、開発区域から宅地部分を除いた道路部分、約391.58m<sup>2</sup>を調査対象区域として本発掘調査を実施し、その後、平成26年4月～平成27年3月にかけて整理作業を行い、本報告書の刊行となった。

## II 位置と環境

### 〔地理的環境〕

福満遺跡は、彦根市北部の西今町に所在する遺跡であり、犬上川の右岸に位置している。遺跡の南方に流れる犬上川は、彦根市東方に位置する靈仙山系を發して西方の琵琶湖へと注いでおり、その中流域においては、堆積作用によって広大な扇状地が形成されている。

福満遺跡の所在する西今町周辺については、この扇状地の扇端部にあたることから複数の湧水地が存在しており、そこから供給される水は、周囲の田畠を潤している。また、この地域には犬上川やその支流の旧流路によって形成されたと考えられる自然堤防や小規模な谷地形が散在しており、この地域を特徴づけている。

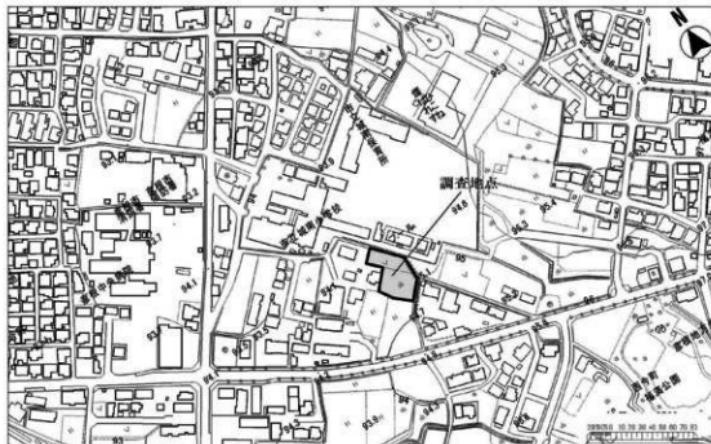


図1 ●●●

今回の調査地点は、周辺部においては比較的標高の高い微高地上に位置しており、その土質は多少の砂質を含んだ明黄褐色土からなる、安定した地盤となっていた。

#### [歴史的環境]

福満遺跡においては、過去11次にわたる発掘調査が行われてきた。その調査の中では、これまでに縄文時代前期末および後期・晩期頃の土器を含む包含層や、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての堅穴住居、平安時代の掘立柱建物や土坑などが検出されていることから、これら各時期にわたる複合遺跡であることが明らかとなっている。

今回の調査地点の北方約20mの地点においては、昭和56年に実施した福満遺跡4次発掘調査の第1トレンチが位置しており、この地点では平安時代の遺物を含む土坑や小穴群が検出されている。このため、今回の調査地点においては、古代の集落跡に関わる遺構群の存在が想定されていた。

### III 遺構と遺物

#### 基本層序

調査地点においては、表土層である灰色粘質土（耕作土）および褐色粘質土（床土）が約40~60cmあり、その下部において、地山層を確認した。

この地山層はやや砂質を含む明黄褐色土層からなり、付近一帯の基盤層を形成している。遺構はこの地山面から掘り込まれており、この面において、古墳時代および古代の各時期にわたる遺構を検出した。

#### 検出遺構

発掘作業は、地表面から約40~60cm余の耕作土を除去したのち、地山層の上面において遺構の検出作業を行った。その結果、土坑墓2基、溝2条、小穴群などの遺構を検出した。以下、各遺構について詳述する。

#### 土坑墓

##### ST01（図5）

ST01は、平面隅丸長方形のプランを呈する土坑墓である。規模は、長軸2.3m×短軸約70cm×深さ約50cm程度を測り、主軸は北東-南西方向をとっている。埋土は黒褐色～暗褐色を呈する、やや目の粗い土質であり、縄文土器のものと思われる微細な土器片をやや多く含む。なお、土層断面の観察からは、木棺等の使用は認められなかった。

主要な遺物としては、内部から完形の須恵器壺および壺蓋等が出土している。

##### ST02（図5）

ST02は、平面隅丸長方形を呈する土坑墓である。規模は、長軸約2.5m×短軸約90cm×深さ約50cmを測り、内部からは、須恵器小破片が数点出土している。出土した須恵器片から年

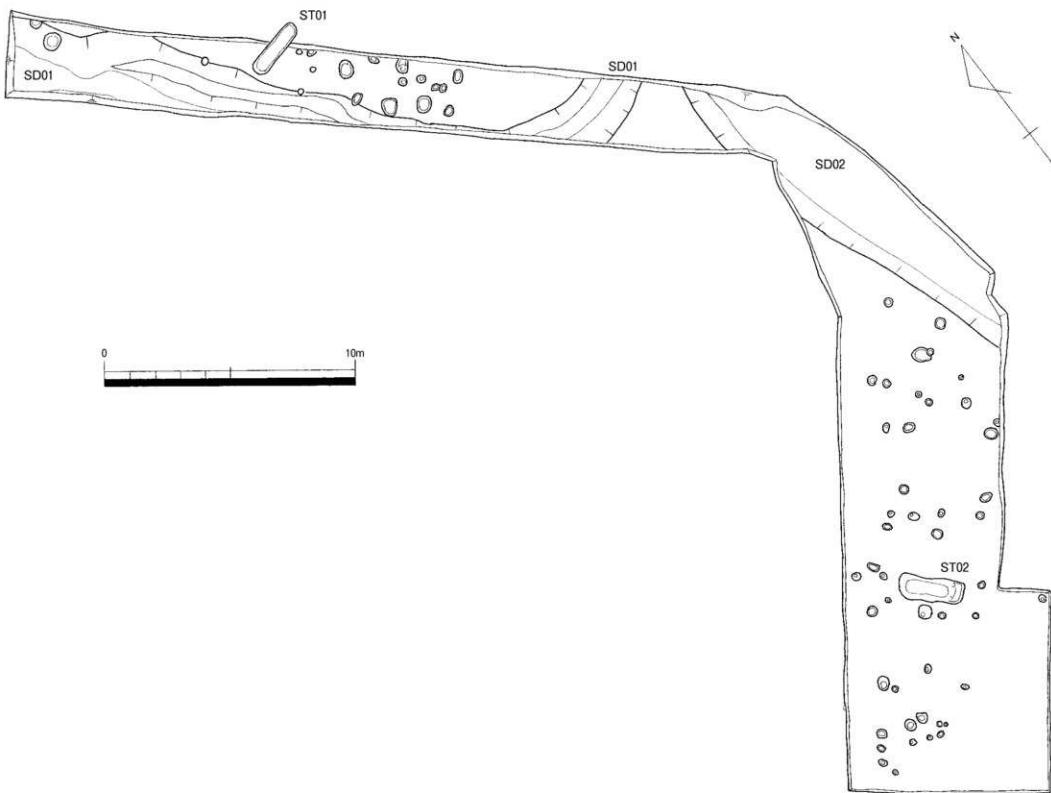


图2 遗构配置图（全体图）

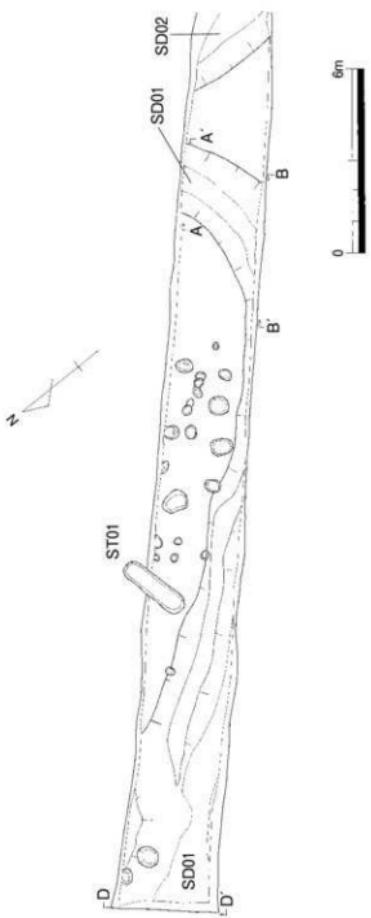


図3 調査区西半部 遺構配置図

代を特定することは難しいが、埋土がSK01の土質と近似することから、概ね同時期の遺構であると考えられる。このほか、同埋土中からは縄文時代後期・晚期頃の土器小片が多数出土していることから、この土坑墓の構築時には、一帯に多量の縄文土器片を含む遺物包含層が広がっていた状況が想定される。

## 溝

### SD01（図2・3）

SD01は、西岸部の大半が調査区外となっているため全容は不明であるが、調査区内においては、上端幅約2.4m以上、底部幅約80cm、深さ約70cm～100cmを測る溝となっている。溝は調査区内北東部において約90°緩やかに屈曲しており、北東から南西へ伸びてきた後、方位を北西方向へと変えて調査区外へと伸びてゆく。埋土は灰褐色を呈する、やや砂質を多く含む土質である。

出土遺物は土師器小破片と縄文土器の小破片のみであることから、その構築時期は不明であるが、緩やかに円弧を描く平面形態から、古墳の周溝、あるいは何らかの区画溝であった可能性が考えられる。

### SD02（図2・3・4）

SD02は、主軸をほぼ正南北に取る、比較的規模の大きな溝である。東岸部が調査区外となっているため、その全容は不明であるが、調査区内においては、上端幅約3.5m以上、底部幅約2.6m以上、深さ約1.2m以上を測る。

その埋土は、主として灰褐色系統の色調を呈する砂質土及び、径1～5cmほどの円礫層によって形成されていた。調査地は、周辺に比較して、やや標高の高い地点に位置していることから、これほど大量の砂礫が、溝を完全に埋没させるほどに流入してくる状況は考えにくくない。このため、可能性としては耕作地を開墾するにあたり、人為的に溝を砂礫によって埋立てたという可能性も考えられる。

また、SD02の主軸が正南北を取っていることについては、この溝に隣接している現代の里道の主軸が、この溝の主軸とほぼ一致することから、このSD02と里道の主軸が、西今町周辺に条里制が施行される以前の地割を示している可能性も考えられる。

## 出土遺物

今回の調査地点においては、ST01・02から出土した遺物を主体として、かつてこの地点に広がっていたと考えられる、縄文時代の遺物包含層由來のものと思われる縄文土器が出土している。以下、各遺構からの出土遺物について詳細を記述する。

### ST01（図5-1～6）

ST01からは、須恵器6点が出土した。器種は、壺蓋（1～3）、壺身（4・5）、高壺（6）となっており、高壺は脚部が欠損していた。遺物の時期は、概ね6世紀末から7世紀初頭にかけての時期を示す。また、脚部の欠損した高壺については、土坑墓内部から脚部の出土が

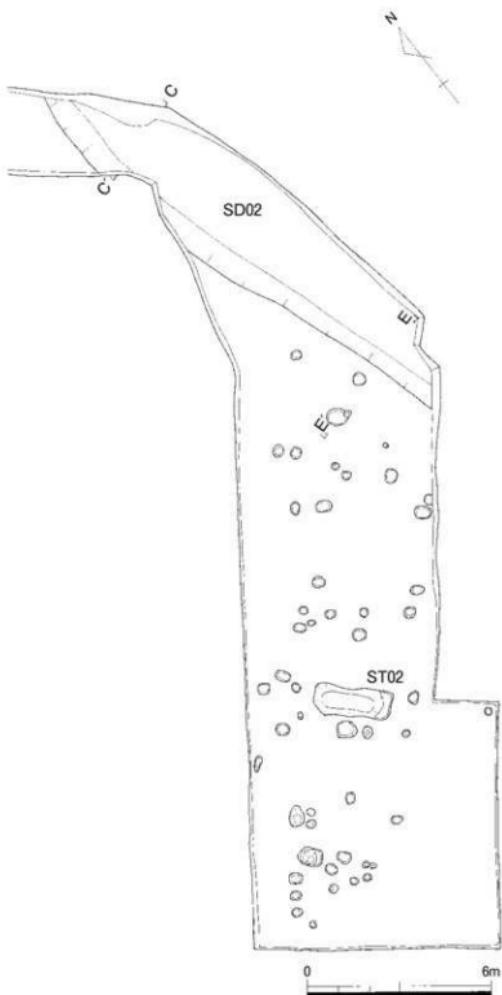


図4 調査区東半部 遺構配置図

認められないことから、意図的に打ち欠いたか、使用に伴い欠損したものを壊として転用したものと考えられる。

出土状況としては、土坑墓の底部付近、平面的な位置では中央部および北東端部の2ヵ所に集中して出土していることから、副葬品として供献された時点での位置関係を反映しているものと考えられる。

また、同遺構内からは縄文時代晚期頃のものと考えられる土器の小片や、安山岩の剥片(15)も出土しており、近隣に縄文時代晚期の集落があった様子がうかがえる。

#### ST02

ST02からは、須恵器の小破片が1点出土した。残存状況が悪く時期を特定できないが、ST01と埋土の質・遺構の形態ともに共通していることから、ほぼ同時期、概ね6世紀末から7世紀初頭にかけての時期の遺構であると思われる。また、同遺構中からはST01と同じく、多数の縄文土器小片が出土しており、これらはいずれも縄文時代晚期の所産であると考えられる。

#### 小穴群（図7-7～16）

小穴群からは、縄文時代晚期の土器片が多く出土しており、その中から図化可能な遺物について掲載することとした。以下、その詳細を記述する。

P1 P1からは縄文時代晚期の深鉢片（8）が出土した。

P3 P3からは縄文土器片（7・9・11・14）が出土した。このうち7・9・11の3点については、内面にヨコナデ、外面に貝殻条痕を施す。14については、幅の狭い突帯を口縁下に貼り付け、工具による刻み目を施す。

P4 P4からは、磨石片（16）が出土した。16は、大半が欠損しているものの、楕円形を推定させる曲線をわずかに残すとともに、磨面については、極めてなめらかな表面となっており、使い込まれた状況がうかがえる。

P7 P7からは、縄文土器片（10）が出土した。口縁部直下にはやや幅の広い突帯を貼り付け、その上面に貝殻圧痕を施す。

P8 P8からは縄文土器片（12）が出土した。口縁部直下に突帯を貼り付け、指オサエによる刻み目を施す。

P9 P9からは縄文土器片（13）が出土した。口縁部直下に突帯を貼り付け、指オサエによる刻み目を施す。

## IV 調査の成果

今回の調査においては、土坑墓2基(ST01・02)、溝2条(SD01・02)、小穴群を検出した。

このうちST01・02については、周濠などの施設の有無は不明であるものの、SD01などのように円弧を描くように延びる溝が周間に存在することから、これらの土坑墓についても、

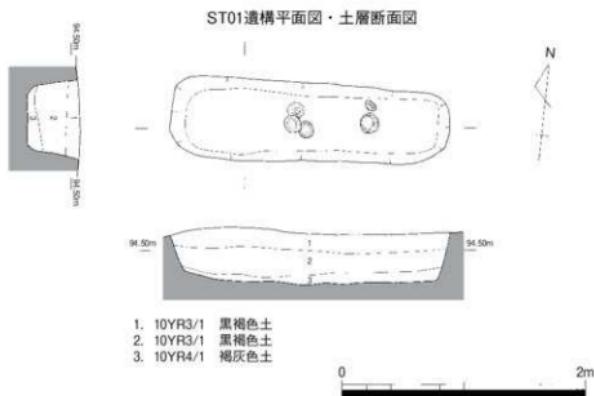
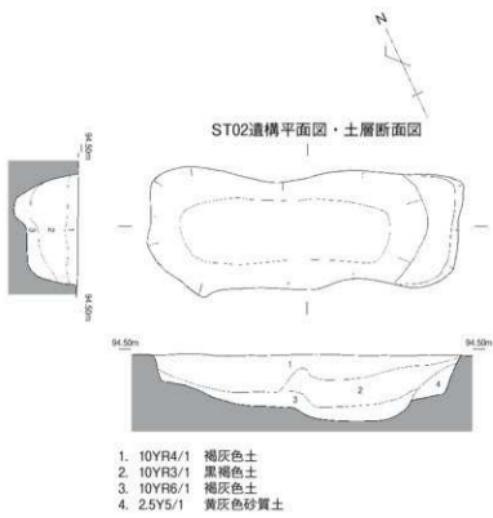


図5 ST01・02 遺構図

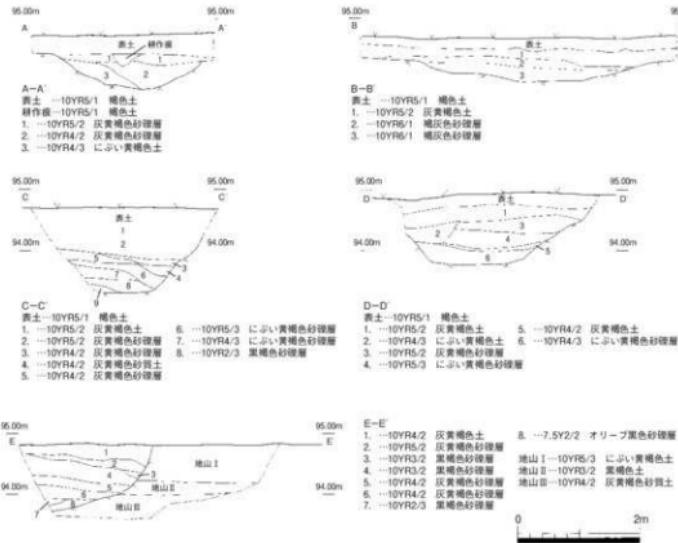


図6 溝・土層断面

本来は古墳の主体部を成していた可能性が考えられる。

また、これらの遺構の内部からは、縄文時代の遺物が多数出土しており、周辺に縄文時代晩期の遺物包含層が広がっていた様子が理解されるが、調査の時点では、耕作土直下において地山層を検出しておらず、こうした包含層を確認することはできなかった。

近隣には「久保田」や「九文免」といった、莊園にその起源を持つと考えられる地名が複数見られることから、おそらくは古代末から中世にかけて、当地周辺の耕地化が進んでいった様子が推定される。このことから、先述の縄文時代遺物包含層を現状で確認できない理由として、この耕地化に伴う当地一帯の削平によって、削り取られてしまったものと考えられる。

福満遺跡で行われた発掘調査の中では、これまでに5次調査および8次調査において弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる方形周溝墓が検出されるなど、墓域としての性格もあったことが知られている。

今回検出した土坑墓については、概ね6世紀末～7世紀初頭のものとなっているが、その墓域としての起源はあるいはこの方形周溝墓の築造時期に遡る可能性がある。

また、このような墳墓が福満遺跡内の比較的広い範囲に分布しているという状況は、これまで「集落跡」として考えられてきた当遺跡の性格について、再考を迫るものとなった。

しかし、依然として当遺跡には、調査のされていない多くの空白地帯があるために不明な点も多いことから、今後の周辺における新たな知見の増加が期待される。

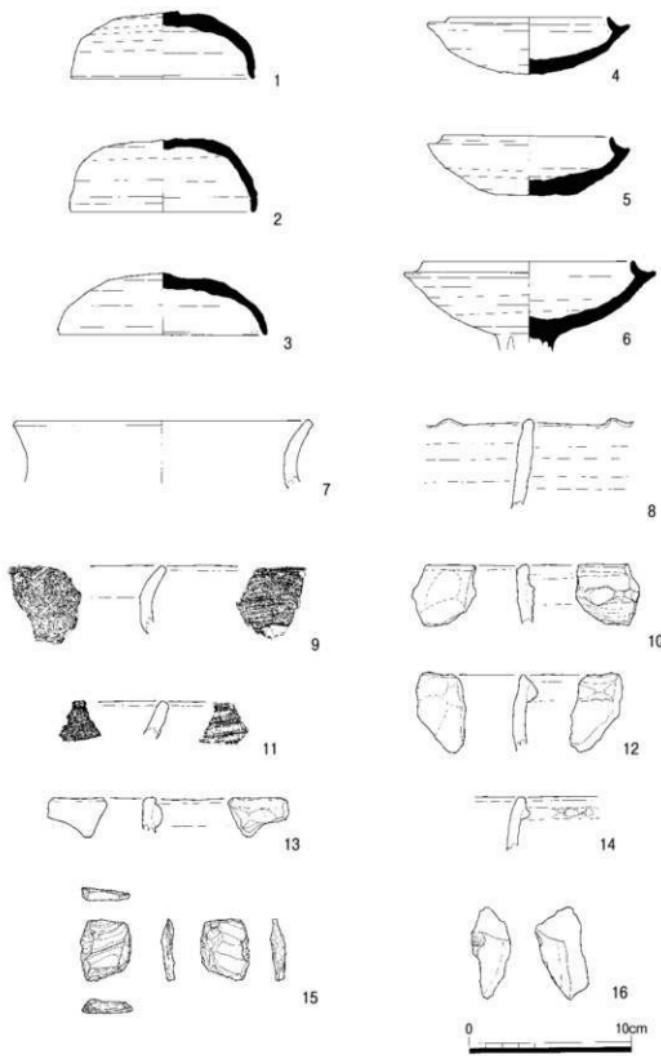
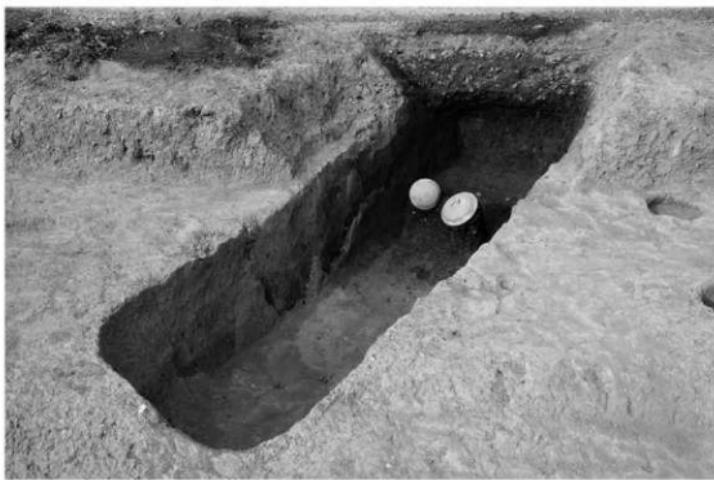


図7 遺物実測図





1 調査区全景（北西から）



2 ST01完掘状況（南西から）

図版  
2



1 STO1土層断面（東西断面一南半部）



2 STO1土層断面（東西断面一北半部）



1 ST01遺物出土狀況（西半部）



2 ST01遺物出土狀況（東半部）

図版  
4



1 ST02完掘状況（南西から）



2 ST02完掘状況（北から）



1 ST02土層断面（西から）



2 ST02土層断面（東から）

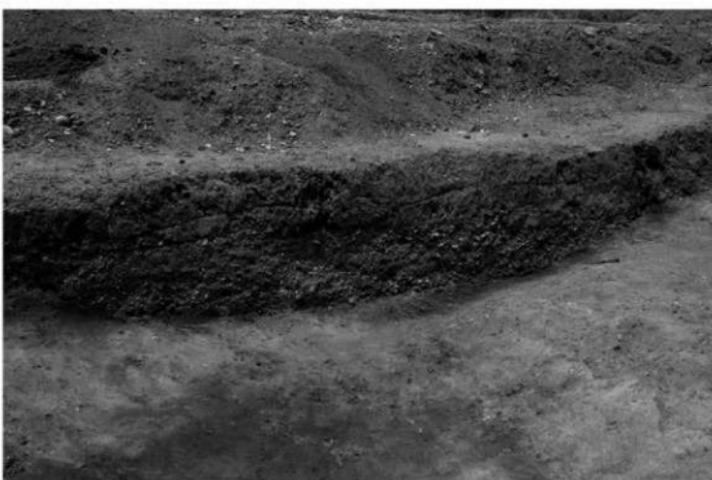
図版  
6



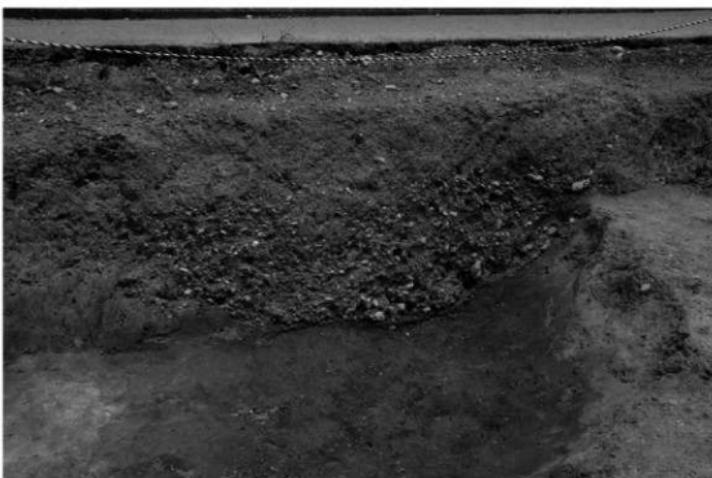
1 SD01完掘状況（南から）



2 SD01土層断面D—D'（南東から）



1 SD01土層断面 B—B'（北東から）



2 SD01土層断面 A—A'（西から）

図版  
8



1 SD02検出状況（北東から）



2 SD02掘削状況（北から）



1 SD02土層断面 C—C' (北から)



2 SD02土層断面 E—E' (北から)



1 ST01出土遺物



2 ST01出土遺物



1 ST01出土遺物



2 ST01出土遺物

図版  
12



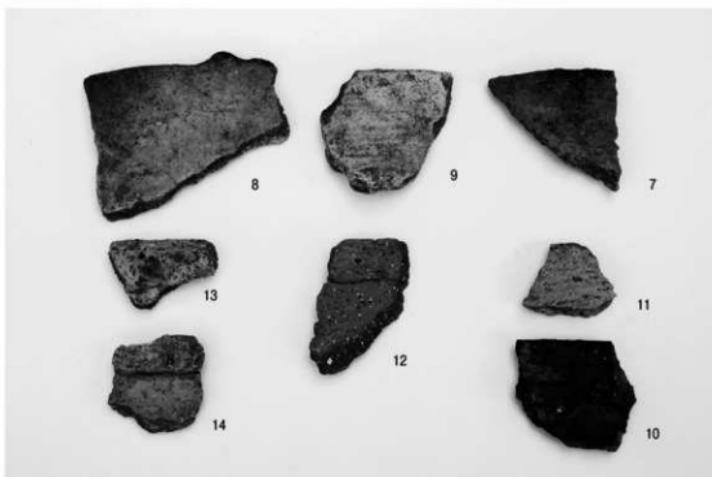
1 ST01出土遺物

5



2 ST01出土遺物

6



1 小穴群出土遗物



2 P4 · ST01出土遗物

# 報告書抄録

ふりがな	ふくみついせきだいじゅうにじはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	福満遺跡第12次発掘調査報告書						
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査						
卷次							
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	59						
編著者名	田中良輔						
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課						
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833						
発行年月日	20150327						
ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯 東経			
ふくみついせき 福満遺跡	ひこねし 彦根市 にいがねし 西今町	25202	015	35度 14分 50秒	136度 14分 36秒	391.58 m <sup>2</sup>	20130621 ～ 20130731 宅地造成工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
福満遺跡	古墳	古墳時代	土坑墓	繩文土器 須恵器 石器	6世紀末から7世紀初頭にかけての土坑墓		
要約	犬上川下流域の右岸における古墳時代（紀元6世紀末～7世紀初頭）の墓域。副葬品とみられる完形の須恵器坏身・坏蓋等、計6個体を伴う土坑墓が検出された。過去の調査事例と併せて、近隣には同時期の墓域が広がっていたものとみられる。						

彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集

## 福満遺跡第12次発掘調査報告書

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成27年（2015年）3月27日発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社

岐阜県岐阜市七軒町15番地

TEL 058-263-4101